親しく正しく和かに
当山先々代三吉日照上人の提唱による当山スローガンです
揮毫＝大本山本興寺御閑士大平日晋上人

季刊『寺楽寿』は東京都世田谷区北烏山の法華宗（本門流）
本覺山妙壽寺が発行する寺報です。
檀信徒の皆さまをはじめ、妙壽寺にご縁のある皆さまに
広くお読みいただければ幸いです。

寺楽寿（てらす）

No.48
令和４年３月１日発行

本覺山　妙壽寺〈法華宗（本門流）〉
〒157-0061　東京都世田谷区北烏山５-15-1
電話 03-3308-1251　FAX.03-3308-7427
ホームページ　http://myojyuji.or.jp

リレーコラム No.5

小僧の修行と盛高のお婆ちゃんの思い出

当山徒弟 石塚泰道

私が10才の昭和32年4月、先々代日照上人の三回忌法要の時、下谷法昌寺住職露木泰隆上人に連れられ妙壽寺に来ました。京王線の新宿駅もまだ板張りの頃です。法要は、婦人会の方々だと思いますが、庭に模擬店を設け、大勢の人がいて大変賑やかだった記憶があります。

その日より私のお寺での生活が始まりました。その年の9月に現住職廣明上人が誕生しました。法昌寺は石塚家の菩提寺で、露木上人は日照上人の弟子だったそうです。その縁で私は妙壽寺に来たようです。

顕道上人の奥様初恵様（後の日恵尼上人）に連れられて4月より烏山北小学校に編入しました。その頃は、お寺には大勢の人がいました。御所化さんの矢吹泰英上人、小澤恵壽上人、高橋顕昭上人、そして盛高のお婆ちゃん（盛高勢以、藤沢市晴明庵建立。昭和38年8月12日寂　浄徳院妙勢日厳善法尼）、お手伝いの女性方々です。

お寺での修行は、起床して一番に客殿の雨戸を開け、部屋の掃除と長廊下の雑巾掛け等を行います。その時に箒の使い方、雑巾掛けの仕方等を教わりました。当時は井戸から汲み上げた水を使うため、冬は手にしもやけ、ひび割れ等があり、子供にとっては大変つらいものでした。また盛高のお婆ちゃんと御霊膳を作り本堂にお供えするのが日課でした。その後、朝のお勤めが終わって朝食をいただき、学校に行き、夕方は4時頃から御霊膳を下げ、その日2回目のお勤めをしていました。日曜日は一日に十座位の法要があり、私も顕道上人のお供をしました。

そのような生活の中で奥様から「お寺は檀家さんあってのお寺ですよ」と言われた事は、今でも大切に思っております。奥様には晴明庵にもよく連れられ、帰りに初めてロマンスカーに乗せてもらったのもこの時です。初代のロマンスカーでした。

思い出深いのは、盛高のお婆ちゃんの買い物にもよく行きました。お婆ちゃんの好物は網の佃煮、桃屋の花ラッキョウ、新宿中村屋のかりんとう等で、なくなると買い物に烏山まで行きました。またお婆ちゃんは小鳥（十姉妹）を飼っていて、廊下に鳥小屋があり、十姉妹は繁殖するのが早く、小屋はいつもたくさんの鳥で、凄かったです。この子供の時の生活は、今の私に大変役にたっていると思います。

本堂横満開の桜。当山職員（梅原正隆師）得度を記念して植樹。（令和３年撮影）

戦争の悲惨さを知った高木敏子著『ガラスのうさぎ』

平和を思う原点

小野日子（おのひかりこ）（外務省 外務報道官）

外交官を目指したきっかけは中学1年生で読んだノンフィクション文学だった。1978年の読書感想文コンクールで課題図書に指定された「ガラスのうさぎ」だ。両親と妹をなくした少女を通じて戦争の悲惨さを、作者の高木敏子先生が実体験をもとに描いた。

私はコンクールで総理大臣賞をもらい授賞式で当時の皇太子殿下・妃殿下の前で作文を読む大役に緊張していた。そんな時、初めてお目にかかった先生は「この本を読んで感じたことを忘れないでね」と優しく話しかけてくれた。

もともと両親の影響で戦争に関する本を読む習慣はあった。先生との出会いで「戦争を知らない世代でも世界平和に貢献できないか」という思いを強くし、外交官試験に挑戦して88年に外務省に入省した。

2000～03年の米国駐在時に子どもを出産して帰国、仕事と子育ての両立で余裕がなくなっていた時、再度先生にお目にかかる機会を得た。

「母になった今こそ平和の尊さを実感できるはず。これからも平和な世界のために頑張って」。戦争で壮絶な体験をしたにもかかわらず、先生はいつもパワフルだ。人生の節目節目で原点を思い出させてくれることに感謝の念は尽きない。

（2021年12月30日　日本経済新聞）

高木敏子氏
（令和元年元旦、当山にて）

【高木敏子プロフィール】昭和７年、東京市本所区（現東京都墨田区）生まれ。自らの戦争体験を書いた『ガラスのうさぎ』（金の星社）で厚生省児童福祉文化奨励賞、日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞。映画やドラマにもなり、注目を集めた。出版後は平成18年まで全国各地を講演。

寺日記（てらにっき）

- ●1月1日　国祷会法要（午前5時）
- ●1月16日　沼津大本山光長寺第78世、東之坊第54世大僧正石田日信上人御遷化　通夜23日於東之坊、葬儀24日於大本山光長寺
- ●1月17日　烏山仏教会　先師追悼会・総会　於 永願寺
- ●1月20日　第一次金井内局発足　当住上人布教部長就任
- ●1月22日　総代会・年頭会祈願法要
- ●1月31日　本堂屋根小屋組改修工事開始（清水建設、3月15日完成）❶
- ●2月3日　節分法要❷
- ●2月7日　大竹家稲生家年回法要（猿江別院寄進稲生雅治氏叔父・五十回忌、同御尊父二十七回忌）
- ●2月8日　金井内局就任式　於尼崎市大本山本興寺❸
- ●2月16日　新内局、大本山光長寺（沼津）、同鷲山寺（茂原）へ参拝、御挨拶
- ●2月19日　朝霞教会年回法要　担任相澤龍生上人御母堂（信聰院妙因日松大姉）第二十三回忌
- ●2月24日　内田祥哉先生感謝の集い　於 明治記念会館

当住上人叔母三吉恵子さん逝去

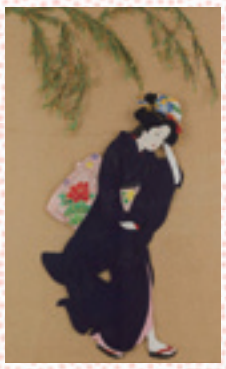
２月12日、当住上人叔母三吉恵子さん（先々代大僧正三吉日照上人五女）が病気療養中のところ、88歳にて逝去（淳正院妙勝日恵大姉）。当山御宝前において葬送。

鵠沼・晴明庵　12月24日 鈴木元子氏逝去

長年にわたり、晴明庵伊東支部をまとめていただいた鈴木元子（慈徳院妙温日元信女）さんが93歳にて逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

猿江・猿江別院　1月1~3日 年頭会❹
2月10日 写経会

丸山ヤス子作 押絵「見返り美人」



当山檀家でちりめん作家の丸山ヤス子氏は、昨年８月、上野の東京都美術館で開催した第53回新院展にて押絵「見返り美人」が自由民主党総裁賞を受賞しました。また、昨年傘寿を迎えた丸山氏は、米国カリフォルニア州の国際学士院大学より芸術博士号を取得しました。今後の益々のご活躍をお祈りいたします。

法要のご案内（別紙参照）

コロナウイルス感染の拡大防止のため、感染対策を十分に行い奉修いたします。

春季彼岸会中日法要
3月21日（月・祭）
初座：午前11時　第二座：午後２時
動物諸霊法要：正午

孟蘭盆会施餓鬼法要
7月16日（土）
新孟蘭盆会法要（新盆）　午前11時
孟蘭盆会法要　午後２時
動物諸霊法要：正午

秋季彼岸会中日法要
9月23日（金・祭）
初座：午前11時　第二座：午後２時
動物諸霊法要：正午

5月7日（土）
午前11時
猿江大祭 法要
於 猿江別院

当住上人の 宗務院 DIARY

- 1/11　責任役員会議，内局会議，本山学林内局調整会議
- 1/20　新内局引継会議
- 1/28　教学研究所所員会議
- 2/ 8　内局就任退任式、内局会議

躑躅（つつじ）観賞会

4月16日（土）
17日（日）
10：00～16：00
客殿２階からもご覧いただけます。

新規墓所ご案内

- 3尺×4尺＝6基
- 3尺×3尺＝6基
- 2尺×2尺＝8基

詳細は当山までお問い合わせください。

予告 猿江別院御写経会

4月7日（木）・6月2日（木）
8月11日（木）・10月20日（木）
※毎回、13時～19時　参加費：500円

正隆会【SHORYU-kai】

月例講ご案内
午後２時開催

当山では、毎月第２土曜日午後２時より月例講正隆会を開催しております。仏教や法華経についての勉強会や写経会、またウォーキング課外活動を行っています。檀信徒、ご友人どなたでも参加できます。例会では、毎回１時半より正隆廟墓前法要を奉修しております。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため離隔距離をとり、実施いたします。

3	月12日	勉強会「日蓮紀行」拝読 18
4	月 9 日	勉強会「日蓮紀行」拝読 19
5	月 7 日	猿江大祭 法要参拝（ウォーク延期）
6	月11日	勉強会「日蓮紀行」拝読 20
7	月 9 日	写経会
8	月	休会
9	月10日	勉強会「日蓮紀行」拝読 21

竹崎清彦シャンソン個展

（檀家・世話人）

ジャック・ブレルを歌う
そして青春時代のフレンチポップスを

ピアニスト：アニエス晶子

2022年4月8日（金）
13:30 － 15:30（全曲仏語）
会場　妙壽寺猿江別院
都営新宿線＆東京メトロ半蔵門線「住吉駅」徒歩５分
（当山関係者先着５名 予約 入場料無料）

宗祖聖誕800年記念・本堂落慶35周年記念インタビュー

鼎談「内田祥哉先生の思い出」（下）

早苗靖夫氏（早苗家12代目当主・当山総代）
三浦清史先生（こうだ建築設計事務所 代表）
三吉廣明上人（当住上人）

令和3年9月13日10時30分より　於妙壽寺（東祥苑・持仏の間）

前号に引き続き、内田祥哉先生（享年96歳）の思い出をお送りします。

鍋島客殿が文化財指定に認定されるまで

住職　そうこうしているうちに、明治神宮の見学会は、東祥苑のときに前後して、建築基準法と文化財保護法の間でこれまた妙壽寺がいろいろと揺れ動く事態になりました。何かというと、鍋島客殿を区の指定文化財とするかしないかということで、これも大論議になったところでしたね。

三浦　そうですね。

住職　もうそれは、例えば既存不適格であれば数千万のお金を使い、間のところに防火壁など必要だったのに……。

三浦　審議会と審査会を通して世田谷区の指定文化財にして建築基準法の適用除外にしないと、客殿は外壁の防火処置などが必要になって、民家の茅葺き屋根をトタンで覆うのと同じように、妻壁の狐格子にしても外壁の下見板にしても元の姿は失われてしまいます。初めはそれでもしょうがないと思っていましたし、文化財にするなんてことは、世田谷区にしても最初に相談に行ったときには、冗談でしょうぐらいの対応でした。

住職　今は逆に、区の広報としても、やはりもっと活用したいと。そういう中で、当時世田谷区の文化財保護審議会の委員だった稲葉和也先生を中心として文化財にしていくという方向にもなり、それから、お檀家さん、議会、近隣の方々、西沢つつじ園（西澤義光）さん、そういう方たちのいろいろなお力添えもあって、文化財指定になりました。それは、内田先生に本当にある意味ではお世話になったと思っております。三浦先生、その辺はいかがですか。

三浦　そういういろいろな方の協力もあって、稲葉先生を口説けたんですね。そして稲葉先生も鍋島客殿の価値を認めて下さった。そうした経緯がなければ、こんな簡単に指定されなかったと思います。小玄関側の改装を前提としてという異例な形での文化財指定だったんですから。

三浦清史先生

三吉廣明上人

早苗靖夫総代

猿江別院
―念願の旧地深川に再建

住職　それで、早苗さんと私とでいろいろな時代を乗り越えてきた中で、猿江別院の建築ということになりました。私、早苗さんに今日申し上げたいのは、天台大師の「霊山会上、現前未散」という言葉があって、法華経の説法というのは、今なおお釈迦様が霊山会上というところで続いているのだよと。そこに私たちはいるのだよということです。「現前」というのは、現在の現に前。「未散」というのは、まだ解散していない。早苗さんも残念ながら解散できないという状況です。

何が言いたいかというと、私が忘れられないのは、あの帝国ホテルでの大会議です。帝国ホテルで、猿江別院の建築チームの方向性をどうしていこうかと。私は、あの会議に内田先生がいらして、最後にいろいろおまとめいただきました。

ただ、私は住職を勤めてからの、最後ということはないですけど、猿江別院は一つの自分の仕事の終わりの部分ではと。あと、徒弟の園田（顕敦）師が、「住職、あと10年ですよ」と。あと10年で妙壽寺400年ということです。ですから、400年の時間を経て、その中でやはり一番長くあったのは猿江なんです。その猿江に妙壽寺のご本尊がもう一回お還りになる、お稲荷さんはあったけれども、施設としてそういう場所を再建したいという思いがあって、そこに稲生家（稲生恵子夫人）のお志があり、再建できたというのは、本当にそういう意味ではありがたいと思っています。

早苗家は、早苗さんで何代目ですか。

早苗　12代目です。

住職　ですから、8代、9代、10代ぐらいまでは恐らく日本橋から猿江の妙壽寺へ通っていたんです。建設委員会のときだったと思います。何十年か前に、加藤とくさんがつくづく、「深川までどうやって行ったんですか」という話になったときに、大正ぐらいまでは神田から船に乗って、神田の水路を出て、大川、隅田川を渡って小名木川に入って、その小名木川から上がって、人力車か円タクで妙壽寺にお参りしたという話を、身近で聞いていました。それはあそこにお堂がなくちゃ駄目だなということはずっと思っていました。

早苗　ですから、過去帳を見て、裏側に書いてあるのを見ると、初代の人の百回忌をやっているというようなことも出ているんです。

住職　なるほどね。

早苗　昔はやはり初代というのを大事にしていたんでしょうね。それと、内田先生との思い出は、伊東深水先生の衝立の「唐獅子」が2階の大広間にありますね。あれをどこに置くかということで、先生と随分論争したんですよ。

三浦　この和室（持仏の間）の残月ですが、残月は普通、床が畳より高くなった上段の床でさらに奥にも床があるんです。それで、最初はそのようにしようとしていましたが、使い勝手がフレキシブルになるように床の間が畳と平らな踏み込み床にするという早苗さんの提案がありました。ただ内田先生はどちらかというとオーソドックスな上段の残月床にしたかったようです。

先生は村野藤吾（建築家 1891～1984）が好きだったろうと思います。この照明も村野さんのデザインです。だから早苗さんの案を説得するために、村野藤吾自邸に倣って踏み込み床の残月にしたいと先生に話をしました。

住職　あと、平井さんがよく実験というか、池に月が映るということですね。

三浦　月見の池ですね。砂利を敷くとゴミや土がたまってきたなくなり、しょっちゅう掃除しなければなりません。それを避けるために下地を網目状にし、その上に砂利を敷き、下に排水のスペースを取る。顕本寺からここ、そして猿江も、内田先生が考え続けてこられたアイディアです。ただ顯本寺と猿江は池ではないので、この東祥苑が完成形といえるのかもしれません。

デザイン、色使いは内田家のDNA

住職　お話は尽きないですが、もう一つは、3年半ぐらい前ですが、私と徒弟の大坪師が三浦先生にお教えをいただいて、隈研吾東大教授の退官にあたって最終連続講義があり、聴講した思い出があります。隈教授の最終連続講義「工業化社会の後にくるもの」を合計10回開催しました。各界の第一線で活躍するゲストとともに、隈教授がこれからの建築のあり方を議論しますが、そのうちの1講義に内田先生がゲストとして「コンクリートから木へ」について1時間ほどの講義があり、そのあと座談会をされました。

内田先生は、今までの研究や作品などをビデオやスライドを使って説明しますが、最初に戦後の焼け野原の映像が出てきました。会場の20歳前後の学生にしたら、神代の時代みたいな話ですね。あれはすごく刺激的でした。

三浦　ロシアに建築を観に行ったとき、同じ建物が何キロもずっと続くプレハブ団地を見て、プレハブの行く末はこうだと。そこで頭を切り替えられたのが内田先生らしいところです。日本の伝統的なシステムの中にあったものを工業化の後にまたよみがえらせることができないか。そこら辺のことを、隈さんが上手に引き継がれるのではないでしょうか。

プレハブ建築に関して、そういうところは、世話人の田邊義雄さんとは気が合ったんですね。

住職　なるほど。講義の後の議論も、教養学部のときには内田先生の講義を受ける前はプレハブ建築というから冷たい先生という印象を持っていましたが、材木とか竹を使うところには、木造建築に対する思いが強くあり、温かい印象を受けたという話をされていましたね。

三浦　そういう話もありましたね。

住職　私はそれが印象的でした。だから、先生の思想とか思い、アイデアというのは、本当に今の方たちに受け継がれていると思います。それから、もう一つ忘れてはいけないのは、ゼネコンの大きい会社の経営の方たちにも、内田先生のスピリットというのはやはりあるでしょうか、先生。

三浦　多分あると思います。今の社会の流れの中では、そういうものがどこまで生かされているか。むしろ研究体制とか、そういうところの中では受け継がれているのでしょうが、それが裾野にまで広がっているのかというと疑問です。そういう意味では、前代から継承される手作り的なところで、そういうところにかける先生の思いと、出来上がったときに誰が責任を取るのかというのが重要な課題だと考えられていたのだろうと思います。その責任がかつては棟梁による設計施工で担保されていたけれども、はたして今日の請負制度や建築基準法や建築士法などの法制度で肩代わりできているのだろうかという問題意識です。先ほど隈研吾さんの話がでましたけれど、そうしたものづくりの伝統を引き継ぐのが彼だろうと、内田先生は評価していましたね。

住職　先日、『隈研吾による隈研吾』を読みましたが、内田先生とお父様の祥三先生の話が面白くて。スクラッチタイルのこと、内田先生と原武史（京都駅ビル設計の内田門下生）さんの項目はぜひ読んでほしいです。

三浦　僕も読みました。妙壽寺と内田先生のお父さんとの関係では、ご住職が言われるように、客殿の移築に内田祥三が関わっていただろうということは、まず間違いないと思います。

客殿を文化財にしたときに、その状況証拠が出てきました。それは何かというと、内田祥三は建築基準法の基になる市街地建築物法の制定に関わっているのですが、もともとの柱の太さだと、その規準に満たないんです。ところが移築時に何本か柱を太くしているんです。なぜそれが分かったかというと、その柱間に入る障子の召し合わせの重なりが大きいところがあって、少し太くした柱があることが分かり、客殿は栂普請（とがぶしん）といって高級な栂を使った建物なのに、太くした柱は杉材なんですよ。それで、その柱が移築時に交換されたもので、その太さがちょうど市街地建築物法に書いてある基準通りなところから内田祥三の関与が推測されるということなのです。

早苗　隈研吾さんのことで言うと、今回のオリンピックの会場の、あたかも満員であるように椅子が並んでいるでしょう。あれは無観客になったのを見越していたみたいな感じがして。

三浦　あれは、隈さんが内田先生の色使いを引き継いだからじゃないかなあ。

住職　スクラッチタイルです。

三浦　スクラッチタイルの陰影や色合いのハーモニーですね。内田祥士先生の西祥苑の屋根をいろいろな色のコロニアルを混ぜて葺くデザインもそうで、内田家伝統のDNAだと思っています。先生の作品ではNEXT21の外壁がそうです。遠目には無地と見える織物が近づくと多色の糸で織られた陰影が見られる色使いが狙いで、オリンピック会場とは目的や効果は真逆かもしれませんが、技術的なアプローチとしては近いところにあります。だから、あれは隈さんなりの内田先生の継承か見事な本歌取りだと思っています。

妙壽寺に多くの建築の「幸福」を残す

住職　内田先生は「テラス13号」で、最後に、「建築というものは、もちろん人を幸福にもするし、そうでもないことも。ただ、そうでない場合に、どうしたら幸福になるかということを考えるというのも建築の役割」という、大変示唆に富んだお話をされていました。

私はもう内田先生と40年間お付き合いをさせていただいて、本当にそういう意味では幸福だったし、最初に言ったように、菩提寺、それは祥三先生、また、その前のご先祖からのつながりの中で、本当に大きく妙壽寺に多くのものを内田先生お一人にお残しをいただいて、それがまた祥士先生にも同じようなお気持ちでお尽くしをいただいてきたというのに感謝申し上げたいと思います。

早苗さん、内田先生との40年のお付き合いについてご感想をお願いします。

早苗　最初に申し上げたように、写真を見ると本当に怖い顔で、それが最初の印象なんですよね。だけど、いろいろお話してみると、本当にざっくばらんにいろいろ教えてくださり、お話ができたのはよかったなと今でも思いますね。

住職　冒頭に申し上げたように、これから妙壽寺として内田先生のご遺志を改めて考え続けなければいけない、それから、先生だったらどう考えられるだろうということを、大変おこがましいですが、思っていかなければと思います。

三浦先生、これから先生には猿江別院の大きな位牌堂という重荷がのしかかっているわけですが、その辺も含めて、お一言いかがでしょうか。

三浦　初めて先生と協働したNEXT21の603住戸の主題は〝き〟がわりの家で、気分、季節、時期、何れの生活の場面にも対応できる住まいを設計しました。その後Vフレームというアルミの可動間仕切りのシステムを基軸にしたインテリアのプロジェクトを〝き〟がわりの假具と名づけ引き続き先生と一緒に考えてきたのですが、その時に先生はよく「臨機応築」という言葉でその趣旨を表現されていたことを思い出します。

3月10日、先生の事務所で猿江納骨堂のエスキスを見ていただいたのがお会いした最後になってしまいました。これからその計画をつめてゆかなければならないのですが、江東区の不条理な条例で納骨堂として活用できるのは約10年後、それまで、できた建物はオルタナティブな使われ方がされるとすると、それに応じた「臨機応築」が設計テーマになるのだろうと、あらためて先生の言葉を噛みしめて考えて見ようと思っています。

住職　ともかく内田先生はこのお寺にとってかけがえのないお方であり、これからもまた内田先生のお気持ちを大切に、お寺を前に進めていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は長時間にわたって、ありがとうございました。（了）